

アジアの交易都市における陶磁器需要と流通に関する研究

野上 建紀

有田町教育委員会文化財課・有田町歴史民俗資料館 文化財専門員（主査）

緒言

本研究の目的は、アジアの交易都市として栄えたマニラにおける陶磁器需要と流通について明らかにすることである。マニラは東アジア・東南アジア交易圏の重要な拠点であると同時にアジアとアメリカを結ぶガレオン貿易の拠点でもあり、商品として扱う陶磁器は多様である。また、マニラはスペイン人、フィリピン人、中国人、日本人など異なる人々の文化や社会が混在する港市であり、都市自体がもつ陶磁器需要も多様であった。

流通と消費の重要拠点としての性格を併せ持つ港市であるマニラにおける陶磁器需要は、多様かつ複雑である。よって、本研究ではまずそれぞれの遺跡の出土遺物を比較検討しながら、それぞれの陶磁器需要の特質を明らかにしていくことから始めることにした。

調査内容

スペイン人の居住区であるイントラムロス (Intramuros) 地区、中国人の居住区である旧パリアン (パリアン) (Parian) 地区については、過去にその一部が発掘調査されている。すなわち、イントラムロス地区内のアユンタミエント (Ayuntamiento) 遺跡、プラサ・サン・ルイス (Plaza San Luis) 遺跡、ベアテリオ・デ・ラ・コンパニア・デ・ヘスス (Beaterio de la Compania de Jesus) 遺跡、バストン・デ・サン・ディエゴ (Baston de San Diego) 遺跡、マエストランサ (Maestranza) 遺跡など、旧パリアン地区のメハン・ガーデン (Mehan Garden) 遺跡、アロセロス・フォレスト・パーク (Arroceros Forest Park) 遺跡などが発掘調査されている。そのため、まだ未発掘調査である旧日本町やフィリピン人集落の発掘調査を行い、基礎資料を収集して、その出土陶磁器の分析を行いたいと考えた。

しかしながら、フィリピン国立博物館考古学部と共同発掘調査を計画し、協議を進めたものの、発掘調査については最終的に館長の許可が下りず、断念した。その代わりに調査許可が下りたイントラムロス出土陶磁器、特

に日本磁器の調査を行うことにした。

調査日程は、(前半)2012年12月24日～30日および(後半)2013年2月21日～3月2日である。前半は主にマニラのイグナシオ・ムニョス (Ignacio Muñoz) 画の古地図に記されている旧日本町および旧フィリピン人集落推定地の踏査とフィリピン国立博物館との交渉にあて、後半にプラサ・サン・ルイス遺跡およびマエストランサ遺跡から出土した陶磁器の調査を行った。

陶磁器調査は、フィリピン国立博物館の協力の下、写真撮影による資料化と日本磁器 (肥前磁器) の抽出を中心に行った。なお、調査の様子はNHK佐賀による撮影が行われ、2013年4月25日 (九州・沖縄地区) および5月4日 (全国) に放映された。

結果

1) 旧日本町推定地について

旧日本町については、岩生成一によってその位置の推定が行われている¹⁾。すなわち、イグナシオ・ムニョスが1671年に描いた「マニラ市並びに近郊地図」(スペイン・セビリヤ印度文書館所蔵)に見られる「ディラオ邑」と古文書に見られる記述を考証した結果、日本町の位置は「議事堂 (Congress Building)、フィリッピン師範大学 (Philippine Normal College)、基督教青年会 (Y.M.C.A.) 及び市役所 (City Hall) を中心とする地域、即ちコンセプション街 (Calle Concepcion) とアヤラ広小路 (Ayala Boulevard) にて囲まれた地域を中心として、旧城壁の東南外方の地域」であったと結論づけている。

岩生の推測に基づき、ディラオ邑を旧日本町と推定し、「マニラ市並びに近郊地図」と最新の衛星写真と地図を重ねた結果、旧日本町の中心部は現在の市庁舎 (写真1) にあたることがわかった (図1)。そして、現地を踏査したところ、市庁舎の建物部分の発掘調査は事実上不可能であるが、建物周辺に発掘調査可能な緑地等を確認した。今後、



写真1 旧日本町推定地に建つ市庁舎

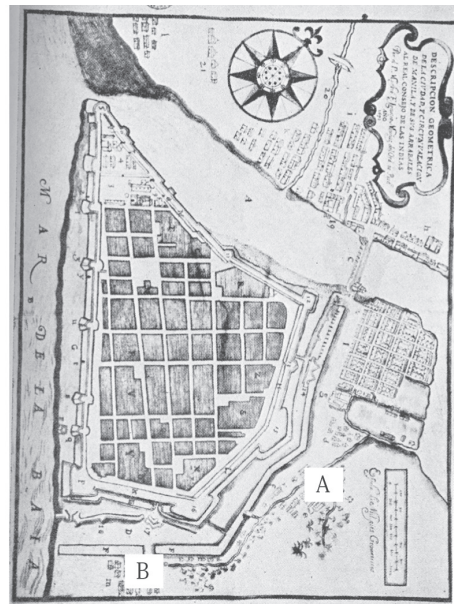


図1 イントラムロス周辺図および古地図 (A: 旧日本町推定地 B: 旧バグンバヤ村推定地)

改めてフィリピン国立博物館側と協議を行う予定である。

2) フィリピン人集落について

「マニラ市並びに近郊地図」にはフィリピン人集落がいくつか描かれている。その内の一つであるバグンバヤ邑 (Pueblo de Bagunbaya) について、衛星写真と地図を重ね合せて、位置の推定を行った (図1)。その結果、現在、イントラムロスの南側のリサール公園にある日本庭園と中国庭園に挟まれたプラネタリウム (Manila Planetarium) (写真2) の敷地にあたるのがわかった。建物部分については事実上、調査不可能であるが、建物周辺の緑地は発掘調査可能である。旧日本町推定地と同様に今後もフィリピン国立博物館側と協議を行う予定である。

3) プラサ・サン・ルイス遺跡出土日本磁器 (図2)

プラサ・サン・ルイス遺跡 (写真3) は、イントラムロスの中央部に位置している。ジェネラル・アントニオ・ルナ通り (General Antonio Luna St.)、リアル通り (Real St.)、カビルド通り (Cabildo)、ウルダネタ通り (Urdaneta) に囲まれた区画にある。西側には通りを挟んで、サン・アグスティン (San Agustin) 修道院、教会がある。

調査の結果、確認された日本磁器 (肥前磁器) は、碗、皿、便器など 23 点である。染付皿は大半が染付宝文皿、染付花鳥文などの芙蓉手皿である。図2-1~3などの染付宝文皿はスリランカのゴール沖で1659年に沈んだアーヴォンドステル号から出土したものと類似している。アーヴォンドステル号は1656~1657年に長崎に



写真2 旧バグンバヤ村推定地



写真3 プラサ・サン・ルイス遺跡現況

来航しており、出土している日本磁器は来航の際に入手した可能性が考えられる。プラサ・サン・ルイス遺跡から出土している染付宝文皿も1650年代頃の製品である可能性が高い。図2-4～16の染付花鳥文皿などはマニラで最も多く出土する種類の一つである。有田外山地区（黒牟田山、応法山、広瀬山など）や嬉野地区（吉田山など）で数多く生産されている。生産年代は1650～1670年代と考えられる。イントラムロス地区内の他遺跡ではよく確認される比較的上質の芙蓉手皿はほとんど見られないが、2005年の調査時には5点確認されている。芙蓉手皿以外の皿も少量見られる。図2-17～19は17世紀後半の染付皿である。図2-20,21は染付碗である。図2-22は色絵瑠璃釉の蓋物の身である。17世紀後半の有田産と思われるが、景德鎮産である可能性も残す。図2-23は染付便器である。生産年代は1670～1700年代である。ベアテリオ・デ・ラ・コンパニア・デ・ヘスス遺跡でも確認されているものである。有田では赤絵町遺跡で同種の製品が出土している。大きさもほぼ同一である。

4) マエストランサ遺跡出土日本磁器（図3）

マエストランサ遺跡（写真4）は、イントラムロスの北側に流れるパジク川（Pasig River）に沿って築かれた城壁部分に位置している。19世紀前半までは兵器工場として機能したが、19世紀末に閉鎖された。その後、建物はアメリカ軍によって使用されていたが、第二次世界大戦で破壊された。2007年に発掘調査が行われている²⁾。

調査で確認できた近世の日本磁器（肥前磁器）は36点である。いずれも17世紀後半～18世紀初めの製品である。ほとんどが染付製品である。



写真4 マエストランサ遺跡現況

器種は、皿、髭皿、碗、鉢、チョコレートカップ、蓋物、瓶などである。皿が最も多く、芙蓉手皿が大半を占める。芙蓉手皿はさらに染付宝文皿（図3-1～4など）、染付花鳥文皿（図3-5～14など）、染付花虫文皿（図3-15～23など）、染付見込日字文皿（図3-24など）などに分けられる。染付宝文皿、染付花鳥文皿、染付花虫文皿はプラサ・サン・ルイス遺跡から出土している製品と同種である。一方、染付見込日字文皿はイントラムロスのベアテリオ・デ・ラ・コンパニア・デ・ヘスス遺跡から同種の製品が出土している。長崎県波佐見地区の窯場で生産されたもので、生産年代は1660～1680年代である。類品が中尾上登窯跡で出土している。染付日字鳳凰文皿と染付芙蓉手皿の文様を組み合わせたものである。図3-25～28は17世紀後半～18世紀初めの染付皿である。図3-29は髭皿であり、メキシコなどではすでに確認されていたが、マニラでは初めて確認されたものである。髭皿は皿の口縁の一部を円弧

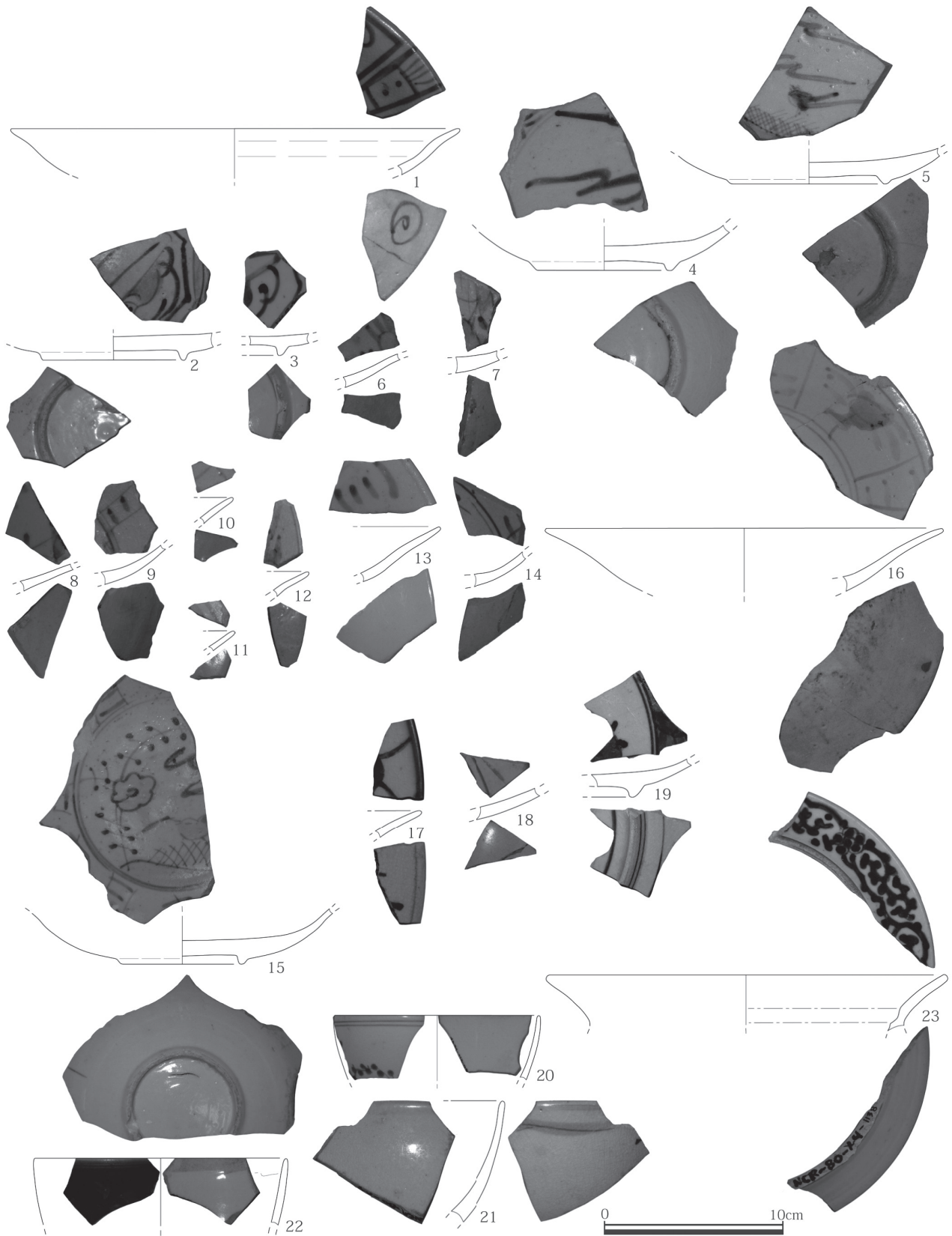


図2 プラサ・サン・ルイス遺跡出土日本磁器

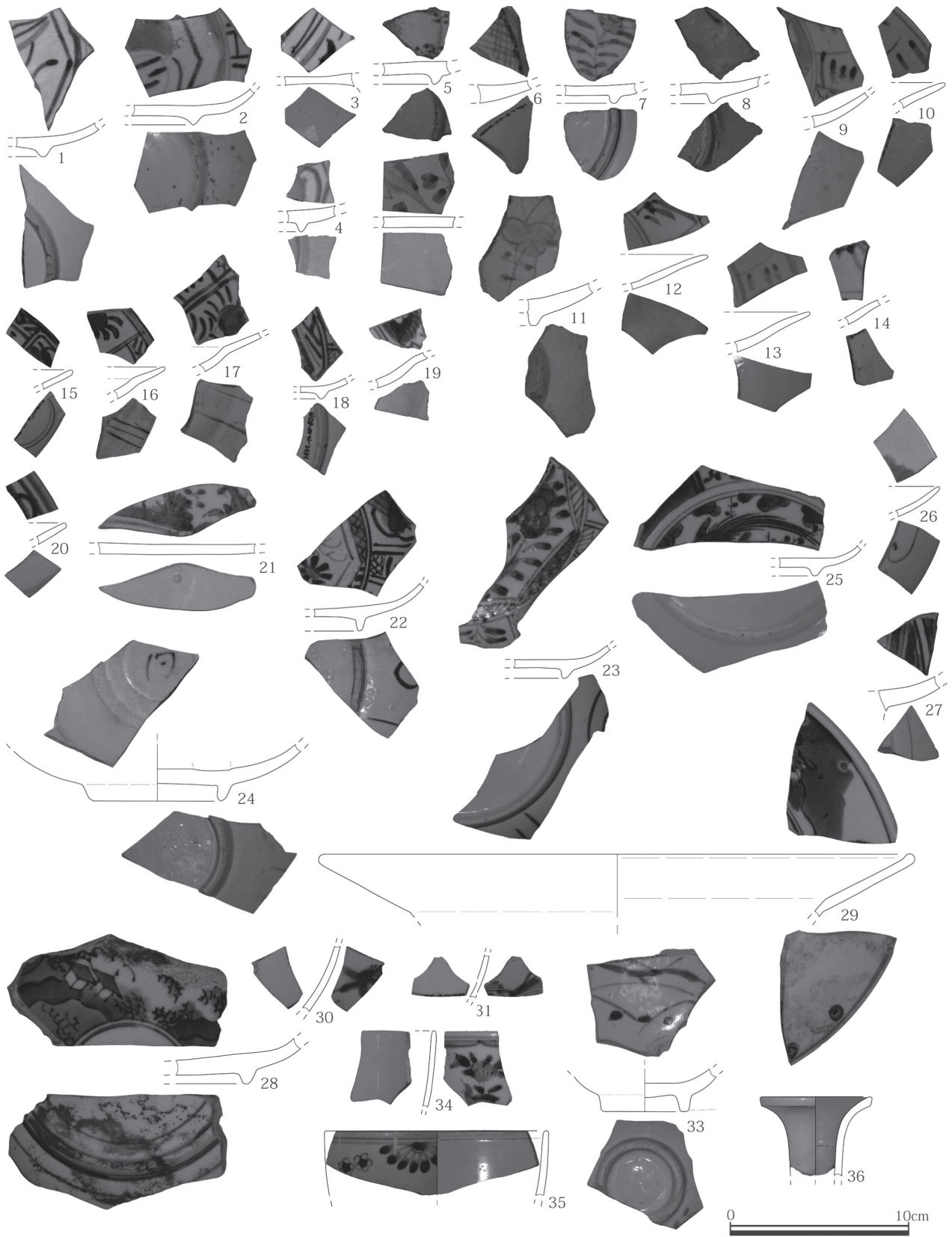


図3 マエストランサ遺跡出土日本磁器

状に切り取った形状をしており、髭剃り用あるいは瀉血療法用の器とされているものである。出土資料は円弧状に切り取った形状の部分は残されていないが、壁面などにかけるために施された2つの小穴を皿の縁近くに確認することができるので、髭皿の一部であることがわかる。図3-33は染付見込荒磯文碗である。生産年代は1660～1680年代である。肥前一带の17世紀後半の窯で生産されたもので、東南アジア帯で出土が確認される製品であるが、これまでマニラでは出土が限られていた。イントラムロスの環濠部（城壁外）に位置するパリアン遺跡から少量出土しているのみで、城壁内の遺跡からは出土例がなかったものである。図3-34は染付花鳥文のチョコレートカップである。1660～1680年代に有田で生産されたものであろう。同種のものがスペインのカディスでも出土している³⁾。マニラから太平洋を渡ってメキシコに運ばれ、さらに大西洋を渡ってスペインに運ばれた可能性を示している。図3-36は17世紀後半の瓶の口部である。

考 察

イントラムロスの遺跡から出土した近世の日本磁器は17世紀後半のものが大半を占めている。また、器種は皿類が多く、その中でも芙蓉手文様の製品が多い。これらの傾向はイントラムロスの他の遺跡、メキシコやグアテマラの遺跡と共通するものである。一方、メキシコやグアテマラと異なる点も見られる。イントラムロスでは品質の異なる芙蓉手文様の皿が出土するが、メキシコやグアテマラでは良質な皿のみ出土する。マニラからメキシコ

に向けて、積み出すにあたっては商品の取捨選択が行われたと思われる。言い換えれば、品質の劣る芙蓉手皿は新大陸に輸出するためではなく、マニラで消費するためにマニラに輸入されたものと考えられる。一方、メキシコやグアテマラで芙蓉手皿と同様に数多く出土するチョコレートカップについては、イントラムロスでは多くは出土しない。マニラで消費するためではなく、ガレオン貿易によってメキシコに輸出するためにマニラに輸入されたものである可能性が高い。同じスペイン人社会であってもチョコレートの原料であるカカオの入手が容易なメキシコと、ガレオン貿易による運搬に頼るマニラではチョコレートの飲用文化の普及の度合いが違ったのであろう。

謝 辞

本研究にあたっては、多くの方々や機関のご協力を得た。芳名を記して謝意としたい。公益財団法人三島海雲記念財団、フィリピン国立博物館、Wilfredo P.Ronquillo、Angel P.Bautista、Ame M.Garong、Alfredo B.Orogo、Nida T. Cuevas、Joe、Dante、Alu、Tuling、Rose、田中和彦、盧泰康、王淑津（敬称略、順不同）

文 献

- 1) 岩生成一：南洋日本町の研究、岩波書店、1966
- 2) Angel P.Bautista：Manila, Selected Papers of the 17th Annual Manila Studies Conference August 13-14, 2008 (Bernardita Reyes Churchill, ed)、the Manila Studies Association, Inc、2009
- 3) 田中恵子：世界に輸出された肥前陶磁、pp.307-312、九州近世陶磁学会、2010